

助産師の役割を

守っていききたい

公益社団法人日本助産師会

角田 佳志恵さん

地域に根差した 仕事をしたい

私は、終末期に携わる看護師になりたいと思いついて看護大学に入学し、在学中に看護師、助産師、保健師の資格を取得しました。病院実習時に立ち会ったお産で出会った方から思いもよらぬ感謝の手紙を頂き、助産師のやりがいを感じ、助産師を目指すようになりました。

大学卒業後、総合病院や助産院で助産師として勤めました。助産師は医師と同じように開業権を持っているので、その後は開業助産師として、区の健診や産後訪問などを通して、たくさんの方に関わってきました。

私の母の名前は、産婆さんが名付け親だったこともあり、幼いころからその話を聞き、助産師を身近に感じていました。学生の頃から、地域看護に興味があり、地域で仕事をしていきたいと考えていたので、生活の場

に向くことが仕事のスタイルになっていきました。

ご縁で現在の日本助産師会へ入職しましたが、今までのキャリアが活かされるのはわかりませんでした。しかし、助産師の見え方が変わるかもしれないと思い、環境を刷新しました。

助産師の役割とは

助産師として地域で直接母子に関わることの面白さは、よりその人の価値観の深いところに触れるということとあります。一期一会の出会いではありますが、助産師としてその場にいることを許されるということは、人との出会いとしては、非常に特殊な体験です。ちょっとした会話から、その人の子どものまなざしを感じたり、ひとつの家族になっていく様子が見られたりすることは、とても興味深いです。

現在の仕事は、今までやってきたことを外から見ることができて、

改めて助産師の必要性を感じ、この職能をこの先にも残していきたいと強く感じています。

私は助産師を社会資源として考えていますが、助産師の役割はあまり知られていない現状があります。助産師は分娩や母子ケアだけでなく、思春期や、更年期を含む中高年期など、女性がその生涯で迎えるさまざまな心や身体に関することの専門家です。

助産師は、女性のライフスタイルに合わせて、健康を支援する仕事であり、その人の一生により添うものではないかと思っています。

助産師のこれから

私の現在の仕事のひとつは、「助産業務ガイドライン」の改訂に関わることです。

助産師は、法的に正常範囲しか扱うことができず、異常になってしまつと、医師の管理になります。特に妊娠から出産の時期は、正常と異常が紙一重なので、細かな判断が必要になります。その指針になるもの（ガイドライン）を、5年に一度見直しています。今年度はその年で、助産師だけでなく産科や小児科の医師も含め、検討を重ねています。

もうひとつは、助産師の実践能力や知識の習得を保証するための仕組みづくりに携わっています。助産に係る複数の団体の協議に

は足りない現状があると言います。

「性についての教え方がわからない家庭では、子供がもつた性に関する疑問を『知らなくていい』と片付けてしまいがちです。何も知らないまま社会に放り出される子供たちは危険にさらされています。子供を被害者にも加害者にもさせないためにも、親が教育することが重要です。今の子供たちは、スマホやタブレットを日常的に使いこなしています。フィルタリングをしていないと、いとも簡単にアダルトサイトに行き着いてしまう世の中になっています。また、親世代よりも1〜2年、身体の発達が早く、性に関する情報もあふれ返っているのに、『正しい知識』の伝え方は昔も今も変わっていません」

性教育に大切な 一度きりルール

ではいったい、どのようなタイミングで正しい知識を子供に伝えればいいのかでしょう。

「性教育には、『一度きりルール』というものがあることを覚えておいてください。例えば子供から『赤ちゃんはどうやってできるの?』と聞かれ、ハッと驚いた反応を見ると、子供は親の反応を見て、『聞いてはいけないこと』

よって社会にも示していくための認証制度が構築されました。つまり助産の職能を保証するものです。「助産の職能が、のちの世に残ってほしい」という私の思いを現実のものとする一助になったら嬉しいです。

私は日々、助産師の活動を伝えていくにはどうしたらいいのかと考えています。助産師の大切な役割を助産師みんなが守っていかれたらと思います。

ガイドラインの改訂や認証制度の仕事は、現場にいた私の視点と、今の私の視点を持って、先生たちの会議での生のやり取りを目にすることができ、とても貴重なことだと思っています。自分の中で成熟させていきたいと思います。



角田さんが働いている日本助産師会は鳥越神社近く。「とりこえサロン」では、子育てに役立つ講座や産後ケアなどを提供

Q どうする? 家庭での性教育

何も知らない子供たちが、性犯罪の被害に巻き込まれる事件があとを絶ちません。家庭での性教育、どうしていますか?

今回は、大正小学校で開催された家庭教育学級を取材しました。



講師の「パンツの教室協会」代表 のじまなみさん
公式サイト <https://pant-su-kyoshitsu.com/>

我が子への性教育の 仕方がわからない

昨年の10月、台東区立大正小学校の家庭教育学級で「性教育」をテーマにした講座が開かれました。

家庭教育学級とは、子供の幸せを願う保護者の思いを学習のテーマにPTAが主催してつくる学びの場所です。大正小学校の実行委員は、テーマを決めるにあたり、みんなで子供に関する悩みを出しあったのだそうです。その中で多く出たのが「家庭での性教育の仕方がわからない」という声でした。

現在、性教育は小学4年生から始まりますが、学校で教えられることは非常に限られています。だからこそ親は、家庭で子供に伝えていく必要性を強く感じているのでしょうか。しかし、どこからどこまでを、どのような教えたらいいのかわからない。インターネットや本で調べても、曖昧としていてわからない。そこで、家庭教育学級に「パンツの教室協会」代表・のじまなみさんを招き、ズバリ、教えていただくことにしました。

性教育は学校では足りない 親が教えることが大切

のじまなみさんは、学校だけでは性教育

なのだと思ひ、2度と質問をしなくなりそうです。子供はただ知りたくて聞いてきます。お子さんに算数や国語を教える時のように、子供が理解できる言葉で、科学を教えるように伝えてあげてください」

また、子供と性について話をするためには、日頃から子供が話をしやすい環境をつくっていくことが大切だとのじまなみさんは言います。

「子供の質問に対して、決して怒らない・ごまかさなない・逃げ出さないでください。どんな質問にも、まず『いい質問だね』と答えてください。そうすることで、話しをしやすい環境になり、ひと呼吸置くことで、親も落ち着くことができます」

それではいったい、いつ頃から性教育を始めたらいのでしょうか。
「私は、性教育のゴールを、子供が思春期になった時に笑いながら性の話ができることと考えています。子供にセックスの話ができたならゴールです。セックスの話をして初めて命の話ができます。セックスの話をしていないと、子供に伝えたい大切な話ができないのです。そこで、子供が2〜3歳のおもらしなどでパンツを汚す時期から、お風呂で一緒にパンツを洗うことを習慣にしておくことで、そこを親子で『性』を語り合うタイミングにしてほしいと思います」